

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(14)

折り返しの世紀に向けて

森下はるみ

二十一世紀に生きる子どもたちのことを想うと、なぜか心が重くなる。それはちょうど、借金をどさりと子どもに残したまま、逝ってしまおうとする親の心境に似ているからかもしれない。谷川俊太郎の詩に、「遠くからみると」というつぎのような一節がある。

驚いたことに遠くから見ると

地球はちっとも疲れているように見えない



まだ手おくれじゃないんじゃないか

今のうちに人類が減ひさえすれば

きっと地球は天命をまっとう出来る

もし本当に地球が大切なら

野牛やシロナガスクジラに譲ったほうがいい

人類の物質的繁栄とひきかえに、(病む)地球を残すはめになった私たち二十世紀人。性や消費に対してだけある程度反応するにすぎない巨大な実験動物(エルヴィン・シャルガル『未来批判』)といわれる二十世紀人。懸命によかれとおもってやってきた産業も科学も開発も、繁栄とひきかえに自己崩壊を内包する過程だったことをあちこちに露呈させながら、私たちの世紀は終わりに近づいている。

宇宙からみると、地球は青く美しく輝いているという。海や光合成をする生物圏が表面をおおうためだが、そこに一万年程前、農耕牧畜によって人工の生態系をつくり始めた人間圏が出現し、地球は大きく変貌したと比較惑星学の松井孝典はいう。その結果、地球上のあちこちに、同じ大きさの生物の十倍、ちようどゾウと同じエネルギー代謝量が必要とする五十億以上の個体がすむことになったと。おかげで、二十世紀後半から、物質消費と環境汚染の加速がますます高まった。もし地球の天命をまっとう



させようと願うなら、あるいは天命は無理でも延命を願うなら、人間圏とその代謝様式の抑制がこれからの課題になる。

ところで二十世紀初頭の子どもはどんなだったのだろう。『幼児の教育』創刊年（一九〇一）に寺内穎による鹿児島の小学一年生六十九人の調査がある。その幾つかを示す。

自分の名を知っている（49）

自分の姓を知っている（51）

一より十まで数えられる（56）

最も悲しきこと 人の打たれし（3）・馬豚の死（3）

最も恐ろしきこと きつね（26）・犬（5）・亡魂（4）

最も好きな食べ物 飯（19）・菓子（11）・米の飯（6）

なんと素朴な曾祖父母世代の子ども時代か。一〇〇年前はもちろん、テレビも絵本も色あざやかな玩具もない、ディズニールランドも自動車もない、ジュースもケーキもない、水道やガスや電話もない、ワクチンも保健施設もないと“ないないづくし”の子ども時代だったことがうかがえる。しかし、何かを得たということは、その他の何かを失ったということ。一〇〇年間の“あるあるづくし”への変貌過程で失ったものも

たくさんある。だからといって後戻りは出来ないが、失ったものうち、かけがえないものをみ直し、回復させることは、そのまま二十一世紀への方向につながる。

研究教育職をあつさりやめ、四十歳で「花屋」になった友人がいる。そのIさんによると、商売はきついが、大きな発見は、花を求めにくる時、お客さんはみなおだやかな、あるいは幸せな表情をしている人が多いことだという。草花や鳥の声になぐさめられたり、山や湖にむかって生きる喜びをおぼえるのも、それとかかわった時の状況や原体験、あるいはもともと人類以前から組み込まれた体験の裏打ちがある。保育施設とはいつ、何を、どのように教えるかの実践の場でもある。教育効果を出来高や効率だけではかることなく、子どもの生活ペースや体験を軸にしたスローな熟成の時間をもっとあってもいいのではないか。

「うさぎおいし　かのやま、こぶなつりし　かのかわ……」が、「故郷愛」につながるように、人への信頼と自然の生態系とのかかわりが、やがて「青い地球」の存続を願う心につながるのではないか。

(お茶の水女子大学)